

刑務所と読書

第一話

汪楠

東京都江戸川区に広がる住宅街の一角、古い二階建ての家屋に、私たちのNPO法人「ほんにかえるプロジェクト」は事務所を置いています。

月に一度だけ手伝いに来てくれる協力者も含めスタッフは約三十人、主に三人の中心メンバーが活動を回していて、ここに「ユウ君」という男性が最近、四人目の中心スタッフとして仲間入りしました。

若々しくハンサムな外見で、四十歳にはとても見えません。悪く言えば、遊び人ふうの「チャライ」雰囲気ではありますが、事務所二階に住み込んで約半年、いまのところ真面目に仕事をしてくれています。

ここに来る前は、三年間、横浜の刑務所で生活していました。窃盗罪で服役した元受刑者。そんな未知の

人物が、「出所したら、ほんにかえるプロジェクトの活動を手伝いたい」と、獄中から手紙で申し出てくれたのです。

長期刑者が持つ雰囲気

私たちの活動は、全国各地の刑務所にいる「会員」に希望する本を届け、事務連絡も兼ねた手紙のやり取りをするものです。ユウ君も半年前までは、塀の中にいる会員のひとりでした。

設立して五年になる「ほんにかえるプロジェクト」の活動には、これまでも元受刑者のスタッフが何人かいましたが、たとえば覚せい剤を断ち切れず、刑務所に舞い戻ってしまったたり、あるいは「ボランティア

＋バイト」という質素な暮らしが続かずに離れていったりと、定着には困難が伴います。ユウ君の将来も樂觀はできませんが、当面は「ボランティア＋生活保護」という形から経済的自立を目指しつつあります。

堅気になるにせよ、犯罪の世界に戻るにせよ、シヤバに出て受刑者は普通、収入のことを考えます。無給のボランティア活動を軸に新生活を始めようとする人はかなり変わっています。ユウ君はいつたいなぜ、このような決断をしたのでしょうか。

「若いころのボクだったら、四十歳の自分がこんな生き方をするなんて、夢にも思わなかったでしょうね」
本人もそう言って笑います。

出身は東京、十代で暴走族メンバーとなり、その後も当時の仲間と徒党を組み、地元・新宿を拠点に盗みや詐欺、暴力事件を繰り返してきました。少年院にも入ったし、刑務所での服役は計三回。横浜以前にも、島根の刑務所で一年半、北海道で二年間、服役しましたが、過去二回の出所後は何の迷いもなく犯罪グループに戻っていたそうです。

「考え方が変わったのは、横浜刑務所の環境が大きかったと思います。前にいた二カ所は短期刑の人ばかり

だったけど、横浜には十年以上の人が結構いたんです。短期の受刑者は『出たら何をやる、何を食べたい』と出所後の話ばかりするものです。でも長期刑の人がそばにいと、そんな話はしにくくなる。やっぱり気を遣うんです。だから全体的に何となく重苦しい雰囲気になる。とくに感じが違うのは、死ぬまで刑務所にいるような年配の無期懲役の人たちです。ボクと同じ房に、実話雑誌などで名を知られた大物のヤクザがいて、有名な抗争事件にかかわって無期刑で服役していました。本人にしてみればやはり、人生に後悔があるようで、そんな感じのことを一度漏らすのを聞きました。権力もカネも手に入れて、犯罪の世界では頂点に近い生き方をした人でも、そんなふうに思うんだ。それがちよつと意外であり、考えさせられましたね」

三度目の出所後には堅気になり、ボランティア活動に参加しよう——ユウ君がそんな決意を固めたのは、「このままだと自分は独りぼっちで死んでいく。そんな人生は嫌だ」と思うようになったためだったと言えます。

「新宿の仲間はみな、結局のところ表面だけの付き合いで、本当に深い関係ではありません。ボクの場合、